

ふるさとの昔話

水のない須津川

須津地区を流れる須津川は、伏流水かくりゅうすいといって水が地下を流れてしまうため、いつもは水が流れていません。今回は、この須津川に伝えられているお話です。



大切な須津川の水

昔々、ある暑い日のことでした。一人の旅の僧が、汗をふきふき須津川のほとりまでやってきました。ちようとそのとき、一人のおばあさんが川のほとりで水をくんでいた。おばあさんは、「おばあさん、その水を一杯私にいただけませんか」と頼みました。しかし、おばあさんは、「こんな大切な水を、縁もゆかりもない旅の人にくれることはできない」と、けんもほろろの答えでした。お坊さんは仕方なく、また、とぼと西の方を指して歩いていきました。

親切な女の人

そして赤淵川のほとりにきました。ところが、この川には水が一滴もなく、からからの河原でした。が、川の手伝いに女の人がやってきたので、せひ水を欲しいと

お願いしました。すると女の人には、「それはお気の毒なこと」と急いで須津川まで行って茶だるに水をいっぱい入れてきました。そして、「さあ、腹いっぱいお飲みなさい」と言って、茶だるのまま差し出しました。

お坊さんの法力

冷たい水でのどを潤したお坊さんは、心からうれしそうに、「東の川には水が流れているのに、お願いしても一杯の水ももらえませんでした。この赤淵川には水がなくて、皆さんが困っているのに、こんなに親切にしていたら」と、お礼を言って西の方へ旅立って行きました。

その翌朝、この女の人が赤淵川をのぞいてみると、不思議なことにきれいな水が流れていました。驚いた女の人には、急いで須津川まで行って見ました。すると、須津川の水はかかれてからからに乾いていたそうです。

地名の由来

石坂 (広見地区)



石坂地区の熊野神社は、石坂村の開拓者鈴木弥右衛門が、紀州熊野神社を勧請したのだと伝えられています。その時期や理由は明らかではありません。思うに熊野信仰が盛んであった室町時代に、御師みしが先達せんたであった弥右衛門が、この地に土着して守神としたものでしょう。石坂という名は、ここが富士溶岩の露出した傾斜地であったからでしょう。

こちら編集室

市民プールにカルガモ一家が住みつきました。十二羽のひなは小さくて、とってもかわいいですよ。しかし、六月十五日は市民プールのオープン。この広報紙が発行されるころには、どこかに引っ越ししなければなりません。ひなが大きくなれば、自然にほかの場所へ移るそうです。潤井川で暮らすようになるといいですね。

ニイハオ 休好



嘉興市



都市部の生活

今回は嘉興市のごく平均的な家族の生活を紹介します。

都市部の若い世代は、日本でいう核家族化が徐々に進んでいます。夫婦に子供1人の3人家族というのが平均的で、労働は1日8時間、週48時間です。

ほとんどの夫婦は共働きで、紡績業や製紙業に従事する人は、3交代勤務もあります。

家事は夫婦ですべて分担しており、夕食は早く帰った方が支度します。そのため、料理はお父さんの方が上手な家庭も多くあります。夕食の時間は長く、家族の団らんをして過ごします。

夜はほとんどの家に普及した白黒テレビを見たり、仕事の勉強をします。

一般の労働者の賃金は月80~90円(3,400~3,800円)ぐらいですが、物価も日本では考えられない安さです。都会の人々は、各企業や政府機関の建てた家に住んでおり、38~40平方メートルの広さで家賃は月3円(約130円)です。日常生活品も電化製品等を除いて、日本に比較して安いものが大部分です。